

【事例紹介】

文化学園大学のダブルディグリープログラム

-大学院英語コースを中心とした交流-

Double Degree Programs of Bunka Gakuen University:
Exchange at Graduate School English Course

学校法人文化学園理事・文化学園大学事務局長 **遠藤 啓**

ENDO Hajme

(Chief Administrative Officer, Bunka Gakuen University)

キーワード：ダブルディグリー、英語コース、グローバル化

はじめに

文化学園大学は、東京の副都心、新宿駅の南口から徒歩7分の地に所在する。学校法人文化学園が設置する学校であり、BUNKAの名称は、世界のファッション教育をリードする学校の一つとして、海外で広く知られている。

このため、海外の大学からの研究者の訪問や、海外の学生達の短期研修、海外業界団体の視察を受け入れるのは日常茶飯事である。外国人留学生数は、学生数の10%超を維持している。併設の文化服装学院では、20%を超えており、大学院段階では、学生数の3分の2以上を留学生が占めている。

ファッション教育は洋装教育が中心であるため、従来は東アジア諸国からの留学生が圧倒的に多かったが、後述のように本学の大学院に英語で学べるコースを設けたことにより、洋装の本場である欧米諸国からも、学生が入学してくるようになってきている。

併設の専門職大学院、文化ファッション大学院大学では、日本語で教育を行っているにもかかわらず、欧米の一流ファッション学校の学卒者が入学するようになってきている。

そのような中で、交流の申し入れを海外の大学から頂くことが多く、ダブルディグリーの覚書は、大学院レベルで3つの学校と交換している。

武漢紡織大学との覚書

中国湖北省にある武漢紡織大学は、現代の中国では唯一「紡織」の語を冠する大学であり、地域の繊維工業を支える大学となっている。本学は同大学の服装学院と交流を行っている。平成24年に相

互訪問の上、提携に合意したが、最初に具体化したのが大学院修士レベルでのダブルディグリープログラムに関する覚書であった。

この覚書では、まず、受け入れ人数は若干名とし、受け入れ大学が選考すること、一方で取得した単位は、他方の国内法規の認める範囲で認定することを定めた。

武漢は秋入学で、修士課程は3年間、作品制作と論文の両方が求められることから、武漢の学生がこのプログラムに参加する場合、武漢で1年半学んだ後、春に来日し、原則として1年半文化で学修し、作品を制作して文化の修士号を取得し、武漢に帰ってから半年で論文を仕上げ、武漢の修士号を取得し、3年半で全課程を修了するという制度設計とした。

来日する者の選考は、第2学期＝第1学年の終了時までに行い、合格者は第3学期から文化の学籍を取得することとして、1年半の日本滞在中で、修士に必要な2年間の在籍という要件を満たせるようにした。また、参加する学生は、第3学期の終了時まで、両大学院に対して研究題目を提出し、両大学院の承認を得ることとした。

文化の学生がこのプログラムに参加する場合は、2年間文化で学修して文化の修士号を取得した後、1年間武漢で学修して、武漢の修士号を取得するという方式だった。

学費については、滞在中の大学の学費を支払う、つまり、武漢の学生が文化にいる間は、文化の学費を文化に納めてもらう方式を採用した。

使用言語については、原則として、大学院所在国の公用語としたが、予想以上に言語の壁は厚く、両方の言語をマスターして、このプログラムに参加しようとする希望者は、現在に至るまで、現れていない。因みに、武漢との覚書は中国語と日本語で作成し、両方を正文とした。本学に、中国出身の職員がいたことが大きな助けとなった。

ダブルディグリープログラムに代わって実現したのが、武漢で学部2年以上を修了し、本学による選考に通った者が来日して、半年間、併設の文化外国語専門学校で日本語をブラッシュアップし、翌春に本学服装学部の3年次に編入学するプログラムで、平成26年9月から、毎年度10数名が武漢から来日している。なお、このプログラムは平成28年9月来日組が最後となり、平成29年9月からは、中国教育省の認可を受けて、本学が協力して実施する特別プログラム(入学定員100人)で2年間学んだ上で、本学の選考に通った学生が40名程度、編入学してくる予定である。

このように、武漢とのダブルディグリープログラムは紙上の存在に終わったが、この策定経験が後のダブルディグリープログラムの基盤となった。

大学院グローバルファッション専修

もう一つの基盤となったのが、大学院の英語コース、「グローバルファッション専修」である。同専修は、平成24(2012)年度、日本語を勉強していないが日本でファッションを学びたい学生のため

に、授業や研究指導を全て英語で行う専修として、生活環境学研究科の被服学専攻(博士前期課程)に開設され、1期生は2名が入学した。その後も、イギリス、米国、チリ、コロンビア、シンガポール、ベルギーなど、これまで本学への入学者が少なかった国から学生を得ている。

これら欧米等からの学生の多くはファッションデザイン領域に関心を有し、日本の伝統的なデザインや最新のデザインを取り入れて自らデザインして衣服を制作したり、日本のデザインそのものの研究を行ったりする者が多く見られる。これに対し、主として他の専修で学ぶアジア諸国からの留学生は、服装が人体の生理に及ぼす研究など、本学が一つの強みとする自然科学的な研究や、ファッションビジネスの研究を志向する者が少なくない。

日本語で学ぶ学生とは異なるニーズを有し、日本語で学ぶ学生に比較して発信力の強い本専修の学生らは、学内で、人数不相応の存在感を示しているが、この専修の存在が、この後のダブルディグリープログラムの構築に不可欠のものとなっている。

浙江理工大学とのプログラム

中国の浙江省にある浙江理工大学から、ファッション分野における交流の申し出があり、平成26年、副学長が先方を訪問した。包括的な覚書の交換後、協議を続けた結果、修士レベルでダブルディグリー覚書を交換することとなった。

この覚書でも、武漢の場合と同様、受け入れ人数は若干名とし、受け入れ大学が選考すること、一方で取得した単位は、他方の大学の国内法規の認める範囲で認定することを定めた。学費についても、学生が滞在中の大学の学費を支払う、武漢の方式を採用した。

浙江理工大学の修士課程は、武漢とは異なって2年半であったことから、どちらが派遣する場合も、2年半の課程で修了する制度設計が可能となった。

どちらから派遣する場合も、第1学期終了時までには受け入れ大学の選考を受け、その学籍を取得するとともに、指定された期日までに両大学に対して研究題目を提出し、その承認を得る。第2学期開始時(浙江から来る場合は4月、文化から行く場合は9月)から第3学期終了時までの1年間、受け入れ大学において学修し、所定の単位を取得する。第4学期から派遣大学に戻って、第5学期に修士論文を完成し、どちらかの大学で修士論文の発表を行う。修士論文の審査は、それぞれの大学で行い、審査の結果に関する情報は他大学に提供するというものである。

論文の発表については、理想を言えば、両方の大学で行うことが望まれるが、中国の場合、期日までにビザが出ないために学位が取れない、という事態も想定されるため、一方の大学で発表すれば良いこととした。学位審査に関しては、ダブルディグリーであってジョイントディグリーではないので、一方の審査は通過しても、他方の審査は通らないという可能性があることは、当然の前提としている。

浙江の覚書が武漢と異なるのは使用言語であり、受け入れ側の公用語または英語を用いることとし、

英語を選択肢に加えた。浙江理工大学は、欧米で学位を得た教員が多いことがその背景にあり、平成26年に交換したダブルディグリーの覚書は、英語で作成した。

1期生としては、平成27年4月に1名が来日した。この学生は、学部段階では本学大学院を修了した教員が指導していた学生であり、希望していた研究テーマも、服装が人体に及ぼす生理学的影響に関する研究であった。これは本学が強い研究領域の一つで、世界的にも誇れる研究設備を有している。この学生は、当該領域担当の研究室で受け入れ、帰国後、英語で論文を執筆し、平成29年3月に文化、浙江両方の修士号を取得した。

翌28年4月の来日を目指す学生は、一気に増加した。全員が英語での指導を希望していたので、グローバルファッション専修で受け入れることを前提に、書類選考のほか、スカイプによる面接を実施した。浙江の学生が答えようとすると音声に障害が生じ、なかなか思うに任せなかったが、ファッションビジネスを志望した2名を受け入れることとした。彼らは、この3月で文化での学修を終え、帰国して論文を作成する。

平成29年4月の来日を目指す学生は、8人になった。今回はQQという中国のアプリを利用して面接を試みたが、大きな改善は見られなかった。TOEFL等の英語試験が中国でも実施されていることが確認できたので、次回以降は、TOEFL等の成績を重視することを検討している。

面接を踏まえて検討の結果、3名に対して、文化での学修を許可することにしたので、浙江からの学生は、初年度1名、2年度目2名、3年度3名と増加してきたことになる。文化から浙江に行くことを希望する学生は、まだ現れていない。

ENSAD とのプログラム

フランス文化省所管のグランゼコールの一つである国立高等装飾美術学校(ENSAD)は、1767年にルイ15世から勅許を得たという由緒ある学校である。「国際ファッション工科大学連盟」というファッション系大学の国際組織があり、本学は発足当初から加盟しており、現在理事校の一つであるが、平成26年秋、その理事会がパリで開催された折に、筆者が訪問した。

本学の造形学部長が1960年代に1年間留学しており、その前年に久々に再訪していたこともあってか、予想外の歓迎を受け、学長から英語での学生交流の申し出を頂戴した。

その後の協議の結果、修士レベルのファッションデザインとテキスタイルデザインの分野で、ダブルディグリープログラムを設けることで合意した。フランス人としては異例のバカンスシーズン中のメール交換により、成文を得ることができ、平成27年秋に、覚書を交換した。これも英文である。この折衝の過程では、芸術学という研究フィールドを、ENSADの学長と共有する教員が文化にいたことが大いに助けとなった。

ENSADは5年制の国立の学校で、10のコースがあるが、学生数は700人と少数精鋭。入学試験の倍

率は20倍以上と聞く。卒業証書は、前期3年で学士、5年間で修士相当とされている。4年次の半分又は1年間を国外で研修することが義務付けられており、欧州内だけでなく、世界中の大学等に送り出している。この度は、パリのファッション界で活躍する人材を輩出している文化学園に、この二つの分野の学生を送り出すことにした訳である。

このプログラムでは、派遣するのはそれぞれ2名以内と人数を明記し、使用言語は、どちらの学校でも英語とした。5月～6月にそれぞれが選考した学生を相手側に提示し、合意が得られた者がこのプログラムに参加する。選考の対象になるのは、ENSAD側は今年4年生になるファッションデザイン、テキスタイルデザインの学生、文化側は修士課程に入学したばかりの学生で、修了作品の制作を目指す者ということになる。

9月にENSADの学生が来日し、1年間、文化で学修し、論文を執筆する。文化の学生も同時期に論文を執筆し、これを双方で評価する。所定の成績が得られた日仏の学生は、秋にパリに移り、1年間作品制作に没頭し、6月にパリで、修了作品によるファッションショーに参加し、ENSADの修了証書を得る。(文化の学位の取得は、9月になる。)したがって、ENSADの学生は2年間、文化の学生は2年半で課程を修了することになる。

学費に関しては、ENSADでは、学生が自校の学費を支払うという交流方式を取ってきた。ENSADは国立の学校で、年間の学費が10万円程度と、日本の私学とは大いに異なる。また、同人数の交換を想定していることから、このプログラムでは、例外的に、学生は原所属校の学費を支払い続けるという方式を採用した。滞仏中の文化の学生の学費については、通常半額とし、2年分の学費で2年半の課程を修了できることにした。

第1期生としては、フランス側では2名、日本側では1名が合意され、平成28年9月にENSADの学生2名が来日した。1人はEC、1人はパリ市の奨学金を受けている。この2名は、1年間、他のグローバルファッション専修の学生とともに学び、論文を作成することになる。論文の審査にENSADの教員が来日することは難しいことになったが、修了時の作品の審査には、文化の教員を派遣する方向で検討している。

文化の側の参加学生のため、留学時の資金を確保するべく、複数の奨学金の申請を行っていたが、その後、経済的事情などにより、その学生は第1学年の途中で大学院自体を自主退学することになり、残念ながら、記念すべき第1期は、一方通行ということになってしまった。ENSAD側の学生は、3年間学んだ後で選考され、優秀な学生が来ている。これに対し、文化側の学生の選考は、大学院入学直後に行う必要があり、文化から派遣する学生の質と数の確保と、留学資金は、今後とも課題になると考えている。

終わりに

このように、武漢の覚書を踏まえてプログラムを構築し、グローバルファッション専修でダブルディグリーの学生を受け入れてきたが、同専修の中で2年の課程を修了する学生もいる。また、英語で博士論文の指導を受けることを希望する学生から相談が来ており、英語で研究指導が行える教員の数が増員・確保が今後の課題となっている。大学のグローバル化推進のためにも、こうした教員の増員・確保が今後の課題となっている。